

# 『中国新女界雑誌』に見る日本経由の文化受容 — 明治良妻賢母主義を中心に —

文学研究科社会学専攻博士前期課程修了

王 娜

WANG NA

## 要約

近代中国の文化受容において、西洋からの直接受容のほか、同じ文化背景を持っている日本を窓口として、日本経由というプロセスからの影響も無視できないと考える。本研究は「明治良妻賢母」を中心に、文化受容における「一次受容」や「二次受容」という概念に立脚し、さらに留日女子学生が創刊した雑誌『中国新女界雑誌』という具体的な表現方式を分析した上で、新たな視線で近代中国における「日本経由」という受容パターンを明確に示した。具体的に、清末における「明治良妻賢母」の受容を、清末という時代背景の下で、「国家主義」を出発点として、「国」や「家」という二つの視座から展開した。

## I. はじめに

### 1. 研究背景

近代中国留学史において、日本は最初の留学地ではなかったが、継続時間が最も長く、人数も最も多かった留学地であった。日本に留学した学生は中国の経済、政治、軍事近代化の推進者だけでなく、教育、文学、芸術、女性解放などの近代化の先駆けでもある。この未曾有の留学ブームの中で、女子学生も重要な役割を果たした。1899年に初めて日本へ留学した女性夏循蘭から、1945年に国民政府が留学生を召還するまで、何千年の封建的な礼教に束縛された中国女性は日本に留学し、先進的生産力、政治と文明などと接触し、女性国民の意識を覚醒させ、国家が危機に瀕している時、彼女たちは女性組織の設立、雑誌と新聞の出版、革命運動への参加などの活動に力を傾けた。

当時、留日女子学生は新聞を古い思想を批判する陣地と社会に新しい文明を伝える窓口とした。1898年に康同薇らが主筆した中国初の女性誌『女学報』が創刊されてから10年間、各地で続々と出版された中国語女性誌は約18種類で、その中で東京と上海で創刊されたものが最も多く、それぞれ6種類ある。これは、留日女子学生の東京での出版活動は、清末の女性誌出版活動の歴史において重要かつ不可欠な地位を占めていることを示している。

## 2. 研究対象

それらの出版活動において、1907年2月から出版され、燕斌を編集人とする女性誌『中国新女界雑誌』<sup>1)</sup>は、大きな影響力を持ち、「女学門界之大王」と評価された。

『中国新女界雑誌』は月刊誌であり、全刊の投稿は当時の留日女子学生によるものである。目次をみると、第三号まで図画、論著、演説、訳述、伝記、記載（国内外で発生した事件などの記録）、文芸、談叢、時評（国内と国外）、小説から成っているが、第四号になると、図画、文論、演説、家庭、教育界、女芸界、通俗科学、衛生顧問、文芸、小説に変わった。わずか五期しか出版されなかったが、出版動機から、内容の多様性まで本格的に最初に日本で創刊された女性誌であると言える。また時代背景、影響力などの面を考えると、『中国新女界雑誌』には清末における女子留学生の一側面が如実に反映されており、非常に研究価値があるため、研究対象として考察を試みる。

## 3. 問題提起と仮説

以上のことから、本研究の解明したい諸点は以下の通りである。清末における日本からの文化受容において、『中国新女界雑誌』に見られる「明治良妻賢母」の要素はどのようなものなのか。この受容過程には、受け入れ側の主体として、留日女子学生のどのような意志や目的が反映されたのか。そして、近代中国における文化受容においては、日本経由というプロセスがどのような役割を果たしたのか。本研究は「明治良妻賢母」を中心に、その内実を明確にした上で、『中国新女界雑誌』の内容をめぐって、以上の諸点を明らかにしながら、近代中国における文化移転を考察しようとするものである。

それを解明するために、ここで本論が基とする「文化移転と受容」の理論枠組を紹介する。幸泉<sup>2)</sup>は、文化移転を「送り出し側の社会集団（Sending Social Group）」から見た移転と、「受け入れ側の社会集団（Receiving Social Group）」から見た移転に分けている。その上で、送り手側が開始した移転を「強制（Imposition）」や「説得（Persuasion）」、受け手側が開始した移転を「借用（Borrowing）」や「合成（Amalgamation）」という四つの型に分けている。一方、田林<sup>3)</sup>は、一般的に一つの社会が外来文化を受け入れる時には、①外来文化の輸入、②受容、③定着、④翻案、（場合によっては⑤輸出）というプロセスをたどると述べた。

上述の理論を踏まえて、本論が仮説として立脚している「一次受容」「二次受容」については以下のように考えている。まず、明治維新（1846年－1871年）<sup>4)</sup>に伴い、欧米社会からの衝撃を受け、明治知識人は政治、経済、文化など様々な面から西洋制度や技術を輸入した。この過程で、受け手側として日本社会のニーズに応じながら、日本伝統思想と融合させて日本化を試みた。本論では、この日本

<sup>1)</sup> 女界：女性を表すこと。

<sup>2)</sup> 幸泉哲紀（2004）「文化移転と変容の型」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』、第六号、157頁－164頁。

<sup>3)</sup> 田林葉（2017）「文化の移動と翻案：海外における日本食を例として」『政策科学』第二四巻第四号、237頁－250頁。

<sup>4)</sup> 明治維新の時期について所説あるが、文部省・東京大学資料編纂所編集『大日本維新史料』では、1846年から1871年までと規定している。本論はこの時期に基づく。

化の過程を一次受容と定義づける。

一方、日清戦争（1894年－1895年）の敗北により、当時の中国知識人たちは短時間で強くなった日本に関心を寄せるようになった。清国名臣<sup>5</sup>である張之洞が提唱した「距離が近い、費用が安い、言語相似、風俗相近」という利点によって、明治維新から三十数年後日本留学ブームが始まった。前述したように、当時の女子留学生たちは先進的な文明を学び、日本留学中の見聞を中国に紹介した。留日活動を通じて受容したことも、受け手側である留日女子学生が意識的に中国化した結果である。本論ではこの中国化した過程を二次受容と定義づける。

従来、近代中国における文化移転は、西洋からという論調が強かったが、留日活動による「日本経由」という過程も重要である。以上のことから、本研究は『中国新女界雑誌』に見られる「明治良妻賢母」の要素は、「日本経由」というプロセスの中で、日本が西洋から受容した「明治良妻賢母」を再度受容した、すなわち二次受容をした結果であるという視点から考察を試みる。

## II. 明治期日本における「良妻賢母」の一次受容

明治の文明開化期で流入した西洋思潮の影響で、当時提唱されていたのは西洋式の「良妻賢母」であった。例えば、明治維新後の女学校の端緒となった「東京女学校」では、「女学とはいいながら、一般教育を重視した西欧志向的な教育を実施していた」<sup>6</sup>のであった。欧米文明と接触した啓蒙期思想家たちは、子供の教育に素養と知性を備えた母親を育成することが社会の重要課題であると認識した。こうして、女学の振興、女子教育の発展は、国家と関連づけられ、国家の富国強兵の一環として始められたのである。この時期の「良妻賢母」は、決して単純に伝統文化からなる「良妻」と「賢母」との組み合わせではなく、むしろ伝統的な女性像を批判し、明治初期における西洋文化が伝来しつつあるという社会背景に応じてできた「開明的」な新しい女性像であると考えている。

一方、「良妻賢母」に対する認識も変容を免れなかった。明治啓蒙期の女性観における「良妻賢母」は、日清戦争を経て公布された「高等女学校令」を見てみると、それまでの女子教育理念として明確にされていた「良妻賢母」とは異なっている。

この時期の「良妻賢母」の内実は、西欧から直接受容されはじめた啓蒙期よりも、天皇制国家による支配の強化、ナショナリズムの高揚を背景とする日本の社会環境に即応し、新しい意味合いが付加された。一方、女性も国民の一部であると位置付けられ、「女子教育の盛否は、國家開明の度に準ずるの事實ありて、女子教育の振はさる國は、其國力も相劣れるものの如し」<sup>7</sup>というように女子教育の盛衰は国力の強弱と結び付けられ、教育においてもナショナリズムが強調されるようになってきた。他方、天皇国家制の発展に伴い、また家父長制の家族観が根強く残っている状況も加わり、女性は男性

<sup>5</sup> 張之洞は、曾國藩、李鴻章、左宗棠とならんで「四大名臣」と称される。

<sup>6</sup> 深谷昌志（1998）『良妻賢母主義の教育』、黎明書房、44頁。

<sup>7</sup> 秋月新太郎（1895）「女子教育管見」、女子高等師範学校編輯、女子教育管見 - 国立国会図書館デジタルコレクション（ndl.go.jp）（閲覧日：2022年5月28日）

と同等な国民であると認められても、生理的・心理的に男性と性差が存在しているので、家への奉仕が特に強調されていた。この時期の「良妻賢母」は、「高等女学校令」が公布された後に行われた高等女学校長会議における文部大臣である菊池大麓の演説により明らかに表現されている<sup>8</sup>。

我邦に於ては女子の職と云ふものは、獨立して事を執るのではない。結婚して良妻賢母となると云ふことが将来大多数の仕事であるから、女子教育と云ふものは此の任に適せしむると云ふことを以て目的とせねばならぬのである。

要するに、この時期の「良妻賢母論」は、近代国家の発展に伴い、障害となっていた伝統的な女性像を克服しなければならなかった。しかしながら、家族国家観など日本社会にある特有思想の影響により、「西洋風の有様が宜しいものであるか悪いものであるかと云ふことは随分講究すべき問題である」<sup>9</sup>ので、欧米女性が提唱するように、真の意味での男女平等を実現できなかった。結局、「一時は御維新後總てのことが古いことは皆舊弊と稱して排斥せられたのですが、近来に至つては古いことの中にも良い事もあると云ふ」<sup>10</sup>主張を基に、東洋式でも西洋式でもない、日本式の女性規範である「良妻賢母」が形成された。このように、明治維新をきっかけにして、西洋女性観を受容しつつ、国家主義の高揚を契機として、日本伝統的な文化と融合しながら、日本独自の女性観「良妻賢母」が形成されていった。

「良妻賢母」は明治後期に社会主義者から批判されたが、日本の家族国家観のイデオロギーと非常に合致しているため、国家公認の女子教育理念として存在するのみならず、女性の行動規範と日本人女性観の主流となった。

「明治良妻賢母」は時代的に限定されたものではあったが、確かに日本社会に良い影響をもたらした。その中でも特に重要だったのが、女子教育の振興と女性地位の向上であると考えている。『学制百年史 資料編』<sup>11</sup>により算出した女性就学率からみれば、1873年は15.1%しかなかったが、1883年は33.6%で、1893年四割を超え40.6%になり、「女子高校令」の公布により、1903年は89.6%になり、1907年は95%を超え96.1%になった。これによってわかるように、良妻賢母主義を教育方針とする日本の女子教育は、日本の女性の素質を高めることに大きな役割を果たした。

また、女性の地位について、まず「良妻賢母」により、女性も国民の一部と位置づけ、伝統的な「男尊女卑」を克服し、女性の地位を高めたのである。そして、教育を受けた女性は社会に進出し、明治初期にはすでに女教師、看護婦などの職業が現れ、産業革命により女工が増え、時代が進むにつれて、女性銀行員、美容師、官公庁や企業に勤める女性なども出現した。

<sup>8</sup> 菊池大麓（1902）「高等女学校長會議に於ける演説」『菊池前文相演述九十九集』、70頁。  
菊池前文相演述九十九集 - 国立国会図書館デジタルコレクション ([ndl.go.jp](http://ndl.go.jp)) (閲覧日：2022年6月13日)

<sup>9</sup> 同上。

<sup>10</sup> 同上。

<sup>11</sup> 『学制百年史 資料編』1 明治6年以降教育累年統計：文部科学省 ([mext.go.jp](http://mext.go.jp)) (閲覧日：2022年6月18日)

このように、「国家主義」を核心とした「明治良妻賢母」は、西洋列強の影響を強く受けつつあった清末において、民族独立を訴える民族解放運動<sup>12</sup>に合致しており、また明治良妻賢母によりもたらされた女子教育の振興、女性の地位向上などの現状を目の当たりにした女子留学生は、一次受容を経て形成された「明治良妻賢母」の影響を受け、中国への二次受容を開始した。

### Ⅲ. 清末における「明治良妻賢母」の二次受容

19世紀末の中国は、アヘン戦争やアロー戦争で経済状況がさらに悪化した深刻な国難に、当時一部の官僚や知識人の憂国の情が興って、国家を救うことが時代のテーマとなった。社会を改革し、新政を推進することが焦眉の急であった。日清戦争の敗北をもって、中国知識人は短期間で急速に発展した日本に驚いた。良妻賢母主義が中国に本格的に広まったのはこの時からであった。女学の盛衰が国家の存亡にかかわることを深く意識しており、女子教育の問題も重要な社会問題として注目されたのである。

西洋からの直接受容より、一回削節・酌改した日本を経由した二次受容のほうが、事半にして功倍になり受け入れやすいと考える清国政府は、日本に留学生を派遣した。男子留学より少し遅れたが、20世紀初頭にはすでに日本に留学した女子学生がいた。彼女たちの多くは日本実践女学校に進学し、創立者下田歌子の「揺籃を揺るがすの手は、もっとよく天下を動かすことをうべし」という「明治良妻賢母」式の教育を受けた。このように、文化の受け入れ側である女子留学生は、積極的に日本へ留学し、またその後雑誌を出版するなど「借用」と「合成」というパターンを通して、「明治良妻賢母」を中国に受容した。

一方、文化の送り出し側である日本も「説得」を通じて「明治良妻賢母」をさらに中国に広げた。多くの日本人女教習は中国に招聘され、中国の女学堂で自身が日本で受けた良妻賢母式教育を施した。これらの教習活動はさらに「明治良妻賢母」の中国での伝播をさらに推進した。このように、清末における良妻賢母の二次受容は、変化が激しいという時代背景により、需要者と供給者という二つの社会集団から、それぞれ同時に開始するため、受容速度はより速く、受容程度もさらに深いと考える。

そして、留日女子学生は学問を勉強すると同時に、自分の責任を忘れなかった。彼女たちは日本で積極的に女性団体を組織し、雑誌を創刊することで、日本で触れた新しい知識を国内の女性に紹介していた。「日本留学女子学生共愛会」、「中国留日女子学生会」など多くの女子留学生組織を設立し、同時に日本で『女学報』『女子魂』『中国新女界雑誌』などの雑誌を創刊し、女学の振興、女性権利の追求、民族危機の救うことなどの内容を宣伝していた。

その中で、留日女子学生である燕斌を編集人とする女性誌『中国新女界雑誌』は、大きな影響力を

<sup>12</sup> 民族解放運動：植民地・従属国などで、抑圧されている民族が、他民族・他国家の支配・干渉を排除して、民族の独立を実現しようとする運動。

みんぞく - かいほううんどう【民族解放運動】 | デジタル大辞泉 (japanknowledge.com)  
(閲覧日：2022年6月18日)

持って「女学門界之大王」と評価された。最初に日本で創刊された女性誌であると言えるこの雑誌は政治性の強い清末出版活動の中で、温和的女権主義を持っているため、新しい視点をもたらした。

「本報主義五大演説」で、燕斌は「女界に関する最新の学説を樹立すべきである」<sup>13</sup>と述べてから、今中国の女界はまだ幼稚な段階にあるため、私たちは「西洋諸国、そしてアメリカ、日本女界に関する知識や技術を、すべて訳して書き出し、母国に輸入する」<sup>14</sup>と主張した。

そして、日本が短時間で発展した原因は、翻訳や記述によって、欧米の文明を学んだということにあると燕斌は考えていた。そこで、「我々中国女界を興せるなら、この道に従って進んでいくのは間違いないであろう」<sup>15</sup>と提唱した。一方、燕斌は「学説を樹立することは、医者が出すのと同じように、病気によって薬も当然違ってくる。たとえば、中国の女界は昔から纏足しているが、欧米の女界でも纏足しないように勧めたことがあるのであろうか（筆者注——ここで説明したいのは、欧米は中国のように纏足の習慣がないので、当然ながら天足を解放するという発想はない、ということである）。他の習慣にもいろいろと違っている。そのため、欧米の学説をそのまま受容するだけでは意味がない」<sup>16</sup>と述べた。

ここで、燕斌は他国の学説をそのまま取り入れることはできなく、自国の国情に合わせた上で変容しなければならないと認識している。この点について、田林<sup>17</sup>は、一般的に一つの社会が外来文化を受け入れる時には、①外来文化の輸入、②受容、③定着、④翻案、（場合によっては⑤輸出）というプロセスをたどると述べた。しかし、清末という特殊な時代背景においては、これらのプロセスも同時に発生していると考えられる。そのため、留日女子学生は留学生活を通して、「明治良妻賢母」を受容しているとともに、翻案——即ち自国環境に合わせる変容も展開しつつあった。

それでは、東京で創刊され、編集者の多数が留日女子学生である『中国新女界雑誌』は具体的にどのように「明治良妻賢母」から影響されたのか、そしてどのように中国の国情に即して発展・変容させたのか。これらの問題について、「明治良妻賢母」の核心である「国家主義」を出発点として、第四章で国という視座から、「女学と国家の関係」や「女性も国民の一部である」という二つの視点に分け、第五章で家という視座から、家庭内における女性の身分である「賢母」や「良妻」により、清末における「明治良妻賢母」の中国への二次受容の実態を考察していきたい。

<sup>13</sup> 『中国新女界雑誌』第二号、13頁。  
原文は「第一條、發明關於女界新学説」のである。

<sup>14</sup> 『中国新女界雑誌』第三号、15頁。

原文は「把西洋各國、以及美洲日本、凡係女界的新鮮學術、奇巧技藝、都盡其所知譯記出來、輸入祖國」のである。

<sup>15</sup> 『中国新女界雑誌』第三号、17頁。

原文は「我們中國女界、若要振興起来、也必得順著這箇道兒、是一定的了」のである。

<sup>16</sup> 『中国新女界雑誌』第二号、17頁。

原文は「從來發明學説、與醫生下藥一樣、病症不同、自然藥味也不同。即如中國女界向來纏脚、難道歐美女界、也會勸過放脚麼。其他習慣上、種々不同、如盡以歐美的學説、抄襲來用、是不能切題的」のである。

<sup>17</sup> 田林葉（2017）「文化の移動と翻案：海外における日本食を例として」前掲、237頁－250頁。

#### IV. 「国」という視座から見られる「明治良妻賢母」

すでに触れたように、第二章で筆者は明治維新から始まった日本における「良妻賢母」の一次受容の実態を明らかにした。明治啓蒙期に国家の富国強兵の一環として始められた「賢母」を中心とした「明治良妻賢母」であれ、日清戦争により国家主義が高揚した時期に家庭内の役割を通じて国家に奉仕すると提唱された「明治良妻賢母」であれ、すべては国家的な視点から出発したのである。このような「明治良妻賢母」における国家主義を出発動機とする特徴こそが、清末の「救亡図存」という時代の特徴に合致し、「明治良妻賢母」の中国での受容の深さと広さを促進した。

したがって、欧米における「天賦人權」「進化論」などの自然権思想をスローガンとして、自分自身の利益を守るための女権思想より、「明治良妻賢母」のほうが清末の時代背景と契合した。そのため、「明治良妻賢母」の中国への二次受容において、出発点も一番受け入れられたことも国家主義であると考えられる。そうした中で創刊された『中国新女界雑誌』も当然同じである。

『中国新女界雑誌』が創刊された 20 世紀初頭、二回のアヘン戦争、日清戦争、八カ国連合軍により、中国の民族危機はさらに深刻なものになった。このように、「亡国滅種」の危機感と「強国保種」の緊迫感を意識している留日女子学生は、救国・興国という国家主義を出発点として、国家は男界と女界により構成されているので、男界だけでなく、女界も国の存続に関わる重要な存在であると認識した。そのため、女性と男性が共に奮起してこそ、二億の女性同胞を「国民」に成長させるだけでなく、四億の同胞全員が自立するよう推進することができると考えた。

このように、「国家主義」を核心とした「明治良妻賢母」は、西欧における女性権利を守るための女性解放思想より、西洋列強の影響を強く受けつつあった清末において、民族解放を訴える時代背景に合致している。したがって、国家利益を出発点として、「明治良妻賢母」の中国での伝播が始まった。この時期に創刊された『中国新女界雑誌』に見られた女権思想も同じように、個人の成長や独立した人格も掲げられていたが、民族の危急の時には救国の思想がより強調された。

このような背景の下で、まず女界の盛衰が国家の繁栄と密接に関連することが提唱された。「女界與國家之關係」では、「人を積んで家になり、家を積んで国になる。国というのは、全ての積体であり、家というのは、一部の積体である。積体とは何か、人である。人とは何か、男女両界にすぎない。男がいなければ女だけ、あるいは女がなくて男だけ、どちらも国にはなりえないし、家にもなれない」<sup>18</sup>ということを述べ、女界も国家の重要な構成部分であると強調した。そのため、男界だけでなく、女界も国の存続に関わる重要な存在であると認識しているのである。

そして、国家における女界の重要性について、「女学と国家の關係」や「女性も国民の一部である」にあると具体的に示された。まず、「明治良妻賢母」の影響を受け、燕斌も今の中国の女性は教育を受けていないがゆえに、女国民の精神がなくて、国民がいてもいないのと同じであると「女学と国家の

<sup>18</sup> 『中国新女界雑誌』第二号、153 頁。  
原文は「積人而成家、積家而成國。國之名稱、所以代表全部分之積體也。家之名稱、所以代表一部分之積體也。積體者何、人而已。人者何、男女兩界而已。無男而僅女、無女而僅男、皆不成其為國、並不成其為家」のである。

関係」について説明した。また、人口の半分を占める女性は、国民の一部であるため、当然ながら国民の義務を履行すべきであると主張した。しかし、当時帝国主義と封建勢力の二重圧迫に対抗する中国において、当時社会が必要なのは、純粹な「良妻賢母」である女性だけでは足りなかった。時代が女性に求めていたのは、家庭の枠から脱し、民族の危亡を救う解放運動に身を投じることである。このように、留日女子学生は、国家危機に瀕している際には、女界は団体を組織することで、募金、介護や援助など女国民の義務を通じて男界を支援して国家に貢献すべきであると考えた。

上述のように、「国」という視座から見られる「明治良妻賢母」の特徴は以下の二点にまとめられる。まず、国家主義という前提があるが故に、封建礼教や三綱五常などの学説を批判し、男女平等を提唱したが、女性の権利より国民としての義務が強調されていた。例えば、女子教育が掲げられていたが、何よりも女学の盛衰は国家の強弱と密接に関係しているからである。女性が教育を受ける権利は結局、教育を通じて国民としての義務をよりよく果たすことができるように推進されたのである。また、反纏足という女性の健康権を守っていたが、結局「歩みが困難で、全身の血気が流通できず、病気となった。今、病める女性であれば、将来病める婦人になる。そうしたら、この病気は必ず子孫に遺伝する」<sup>19</sup>というように、次世代国民の健康、即ち国家の未来と関連づけた。

また、女性解放運動を民族解放運動に組み入れたがゆえに、清末の留日女子学生は男性との関係において、協力的であったり、依存的であったりしていた。例えば近代女性の日本留学の初期には、父兄や夫に付き添って日本に渡った。また、最初の頃女性の出版活動には、男性の支持や援助があった。一方、『中国新女界雑誌』は、創刊者から編集者まで女性が担当しているが、多くの場合には、男性と協力したり、補助的に作業することになっていた。

このように、女性解放を国家の運命の中に位置づけ、女性の運命を国家の盛衰の尺度として捉えたため、『中国新女界雑誌』は封建制度や宗族制度を批判したが、結局その何千年に染められた国家性を離脱できなかった。中国伝統思想は、常に国家や家族の利益を強調しており、人々に道德規範を守り、宗法制度と国家利益に従うように要求している。このような国家観は中国社会に根強く残っているのので、留日女子学生にとって、最終的にも国家観と人倫思想の束縛から離れられず、女性の個人としての成長が抑圧されてしまったと考える。これこそが『中国新女界雑誌』の時代的な制約ではないかと考える。

中国では、家族が集まって宗族を合成し、社会を構成し、最終的に国となったと考えられている。そのため、「家国同構」、「家国同治」は中国文化の典型的な特徴となっている。一方、周知のように、儒教の影響を受け、このような国家観は日本でも根強く存在している。それでは、「家国一体」という国家観のもとで、「明治良妻賢母」では、国の延長線である家において、女性の役割についてはどのよ

<sup>19</sup> 『中国新女界雑誌』第二号、3頁。

原文は「既久、擧歩維艱、週身氣血不能流通、斯疾病生矣。此時為病女、將來即為病婦。病體之遺傳勢必更生病子孫」のである。

うに要請されていたのか。また、どのように中国が受容したのか。第五章で、筆者は家という視座から、「賢母」「良妻」という二つの視点に分け、清末における「明治良妻賢母」の中国への二次受容の実態を考察していきたい。

## V. 「家」という視座から見られる「明治良妻賢母」

儒教文化圏にある日本と中国において、女性の活動範囲は厳格に家庭内に限定され、女性に対する要求は女性自身の婦徳また家族に対する服従や孝行にあった。明治の文明開化期で流入した西洋思潮の影響で、国家の富国強兵の一環として、「賢母」「良妻」という二つの女性の役割にさらなる意味合いを与えるようになった。

### 1. 「明治良妻賢母」における「賢母」

次世代の国民の養成と深く関わっている女性が果たす教育の役割がまず強調された。日本の知識人たちは、子供教育また公的教育の補完物として家庭教育という二つの視点から、次世代国民の教育に素養と知性を備えた母親を育成することが社会の重要課題であると認識した。

このような次世代国民の育成という子供教育における「賢母」の重要性を強調している観点は、『中国新女界雑誌』にも見られる。留日女子学生は「女が学ばなければ一家の母が無学になり、一家の母が無学であれば一家の子供の教育が欠如となる。人を積みば家になり、家を積みば国になる。有学か無学か、教育を受けるか受けないかにより、優劣は伺え、勝負は判断できる」<sup>20</sup>と母親の素養は子どもの品行につながり、そして未来の国民になる子どもは国家の運命に直結しているので、子供教育や家庭教育における「賢母」の大切さを読者に伝えた。

そして、教育者としての母親の役割だけでなく、養育者としての母親も衛生、育児、胎教などの知識を備えるべきであると明治の知識人は提唱した。同じように、『中国新女界雑誌』も生理衛生・通俗科学などの科学記事、また育児や家政などの家庭記事に関する実学的な知識を紹介した。

このように、女性は国民の母であるので、母親の素養は子どもの品行につながり、そして未来の国民になる子どもは国家の運命に直結するのである。その故に、国家を発展させるには、女子教育を振興することで、「賢母」を養成しなければならないと提唱された。日本に留学した女学生たちは、その影響を受け、さらに雑誌を通じて中国に伝えた。明治の知識人の「國家富強ノ根本ハ教育ニ在リ、教育ノ根本ハ女子教育ニ在リ、女子教育ノ擧否ハ國家ノ安危ニ關係ス、忘ル可ラス」<sup>21</sup>という主張と同じように、『中国新女界雑誌』も「国民教育といえ、まず家庭教育からである。家庭教育といえ、まず女子教育からである。これは基本の基本、根本の根本と言える」<sup>22</sup>と主張した。このように、子供

<sup>20</sup> 『中国新女界雑誌』第二号、7頁。

「一女不學、則一家之母無教、一家之母無教、則一家之子失教。積人成家、積家成國、有學無學、受教失教、優劣相形、勝敗立判矣」のである。

<sup>21</sup> 大久保利謙編（1972）『森有礼全集』前掲、611頁。

<sup>22</sup> 『中国新女界雑誌』第二号、30頁。

原文は「講國民教育、就先要講家庭教育。講家庭教育、就先講女子教育。這叫做基礎之基礎、根本之根本」のである。

教育における「賢母」の重要性、「賢母」を養成するための女子教育の必要性は清末における「明治良妻賢母」の中国への移転の重要な部分となっていた。

## 2. 「明治良妻賢母」における「良妻」

一方、「賢母」だけでなく、「良妻」に対する期待も掲げられた。「夫を助けていく良妻」や「夫の後顧の憂いのないような良妻」になるという良妻の役割が女性に付与された。日本における「良妻」は、家庭内における家事・育児・事業の補助など「物質的」に夫の内助になることが強調されていた。

しかし、それに対して、燕斌は「本報主義五大演説」で妻の役割に関して、「夫に対して、平等で互いに愛し合うことができる。そして、男性を巻き添えにしないようにするだけでなく、一緒に事業をして、互いに助け合える。そうなれば、その家族の幸せは言うまでもない」<sup>23</sup>と述べた。ここで、燕斌も同じように、「夫を親愛する」、「夫の事業を助ける」という「良妻」の役割を述べ、円満なる家庭を作るべきであると主張した。しかしながら、親愛であれ、事業の補助であれ、夫婦はお互いにすることは大事である。つまり、日本における「夫の内助になる」という妻の一方的な役割に対して、留日女子学生がより強調していたのは、お互いに助け合うということである。

このように、留日女子学生も同じように同様の「良妻」の重要性を提唱したが、帝国主義と封建主義に反対し、民族解放を実現するという背景のもとで、中国の女性は民族解放という時代から与えられた任務を背負われ、家庭内に限らず、お互いに助け合いながら事業を行うなど「精神的」に夫の補助になることを強調した。

一方、戦争を背景として、「夫の後顧の憂いのないような良妻」という「明治良妻賢母」における「良妻」の内実も中国に受容された。日露戦争を背景として、「女々しき泣言を繰り返す」ことは、「夫の勇気を沮喪せしむる」ため、「女々しい醜い涙を落とすことは軍人の妻として恥づべき事」<sup>24</sup>であると考えられ、夫を外事に専念させる「良妻」が要請された。

これに対して、燕斌は「本報主義五大演説」で「多事の年にあつて、男性が徴兵され、出発する時、夫の忠義を励ますことを知らないで、しかも泣きぬれていた。男の心を乱してしまい、どのように戦う気があるのか」<sup>25</sup>と戦時では、出征した兵士たちが戦場で国のために尽くせるようにするため、夫の後顧の憂いのないような「良妻」が期待されると説明した。

ところが、「賢母」であれ、「良妻」であれ、女性の役割が付与されているのは、男女が生理的にも心理的にも、性の差別が存在しており、それぞれ果たす役割は違っているため、家庭内で「賢母」「良妻」としての役割が女性の転職として見なされているからである。このような性差に関する観点は、欧米での留学から帰国した直後に、下田次郎が彼の『女子教育』という本で具体的に論述した。

<sup>23</sup> 『中国新女界雑誌』第四号、26頁。

原文は「對於丈夫、以平等的待遇、交相敬愛、不惟不至拖累男子、並且可以同做事業、互相補助。若果如此、那家庭的快樂、是莫可言喻了」のである。

<sup>24</sup> 鈴木秋子（1904）『軍国の婦人』、104頁。

軍国の婦人 - 国立国会図書館デジタルコレクション ([ndl.go.jp](http://ndl.go.jp)) (閲覧日: 2022年8月7日)。

<sup>25</sup> 『中国新女界雑誌』第四号、25頁。

留日女子学生は『女子教育』の一部を訳述し、『中国新女界雑誌』の第二号から「欧米の女子教育」をタイトルとして連載した。また、男女の性差に関する論述は『中国新女界雑誌』にもよく見られる。例えば、下田は男女の身体の差を「(一) 女子は男子よりも早熟なり、(二) 女子に於ては發達早く止る、(三) 随つて女子の身體の比例は小人及び子供のそれに近寄る傾きがある」<sup>26</sup>とまとめた。これに対して、「婦人問題之古來觀念及最近學說」では、男女における身体上の差別を論じた時に、「言身體之差、則女子較男子早熟、發達先止故女子身體之比例近于小兒（日本語訳：身体上の差といえば、女子は男子より早熟で、發育は早く止まるため、女子の体の比例は子どもに近いのである）」<sup>27</sup>と述べた。

上述のように、『中国新女界雑誌』は男女における性差が存在していることを認め、そのうえで読者に紹介していた。これは、民族解放運動のニーズを満たすために、女性が男性化されたという清末における女性解放運動の潮流とは、多少異なるものがある。例えば、同時期の女性解放運動家である秋瑾には、このような男性化的な心理が顕著に表れていた。彼女は性格が豪快で男装が好きで、男装だけでなく、馬に乗って酒を飲み、劍を帯びて武術を練習していた。これらの動きは彼女の男性をまねるという心理の具体的な表現であると考えられる。このように、清末における女性解放運動では、伝統的な女性像と女性規範が否定され捨て去られた。かえって現実にある男女の性差を無視して「男女平等」を主張していた。急進的な女権主義は男女にあるバランスをとることができず、女性に男性の基準を満たすこと、つまり男性化することを強要せざるを得なかった。

ところが、『中国新女界雑誌』は、男女に性差があることを認めており、これこそが他の女性誌との最大の相違点となり、独自の特徴を持っている原因ではないかと考える。同時に、性差の存在を認めているからこそ、『中国新女界雑誌』は女性の現状を如実に反映し、女性の切実な権利に注目していた。反纏足、興女学などを宣伝するだけでなく、女性の幸福に直結する封建的な結婚制度に対しても強く批判していた。また、生理衛生・通俗科学などの科学記事、育児家政・女芸造花術などの家庭記事という実学に関する知識も中国の女性に普及させた。これらの実学に関する記事は、女性の日常生活と密接に関連している。例えば、「夏日四厭蟲之研究及退治」という記事では、蚊、蚤、臭虫、蠅などの虫が媒介する病気とその治療方法について詳しく解説している。また、専門的な知識だけでなく、著者自身の経験を例にして蚤の捕り方も紹介している。女子教育がまだ普及していない中国に、『中国新女界雑誌』のやり方は女性にとってより適切でより受け入れられやすいと考える。日常の実生活に必要な実学を紹介することで、中国女性に生活を営む見識を身につけさせ、円満な家庭ひいては国家に繁栄をもたらそうとしたのである。

上記のような清末における男性化という急進的な女権思想とは異なり、男女の性差の存在を認め、女性の身近な権利に注目し、女性にとって受け入れられやすい形で読者に知識を紹介するなどの特徴

<sup>26</sup> 同上。29頁。

<sup>27</sup> 『中国新女界雑誌』第五号、19頁。

も、『中国新女界雑誌』の温和な女権主義の具体的な表れであり、また好評を博している原因であると考えられる。そして、男女の性差に関する認識にしても、そこから派生した日常生活に関する実学的な知識にしても、かなり「明治良妻賢母」の影響を受けていると考える。「明治良妻賢母」からの影響、医学出身の主編である燕斌の振る舞いの相乗効果により、最終的に独特な『中国新女界雑誌』が形成され、清末における「明治良妻賢母」の二次受容を完成させた。

しかし、この受容過程においては、そのまますべてを受け入れたわけではない。例えば、日本では、家庭内における「良妻賢母」としての役割を通して国家に奉仕するものと強調されているのに対して、『中国新女界雑誌』は女性も社会に進出できることを提唱している。また、夫婦関係に関して、女性が夫の内助の功にとどまるのではなく、自立心を持って夫とお互いに助け合うことを強調している。国家が危機に瀕している時に、国民一人一人がそれぞれの力を尽くして国家に貢献することが要請された。清末における社会環境を踏まえ、「明治良妻賢母」は中国に伝播すると同時に中国化され、社会背景に即して絶えず変容していった。

## VI. まとめ

以上の考察を踏まえ、全体的にまとめて見ると以下のように述べるができる。明治における一次受容の分析、即ち明治以来日本化の過程を考察することにより、「明治良妻賢母」の本質に迫ることができたと考える。つまり、明治啓蒙期に国家の富国強兵の一環として始められた「賢母」を中心とした「明治良妻賢母」であれ、また日清戦争により国家主義が高揚した時期に家庭内の役割を通じて国家に奉仕するよう提唱された「明治良妻賢母」であれ、すべては国家的な視点から出発したものである。言い換えれば、「良妻賢母」という女性観は日本経由という一次受容の中で、「国家主義」という核心的な要素が強化された。このような「国家主義」を核心とする特徴こそが、欧米における「天賦人權」「進化論」などの自然権思想をスローガンとした自身の利益を守るための女権思想より、清末の「救亡図存」という時代背景に合致していた。それ故に、国家のためにということを目的として、受け入れ側である中国における「明治良妻賢母」の二次受容が始まり、さらに深く広く伝播していった。

その上で、「国家主義」を出発点として、さらに「国」や「家」という二つの視座から展開した。まず、「国」から見れば、清末という時代背景から、女性解放運動を民族解放運動に組み入れ、そしてそれは民族解放運動の不可欠な部分として提唱された。女性解放を国家の運命の中に位置づけ、女性の運命を国家の盛衰の尺度として捉えている。このように、「国」という視座からすると、清末における「明治良妻賢母」の二次受容、即ち中国化には二つの特徴があるように思える。一つ目として、国家主義という前提のもとで、女性の権利より国民としての義務が強調されていた。二つ目は、男性との関係においては、協力的でありまた依存的であることが強調されていた。

そのため、『中国新女界雑誌』は封建制度や宗族制度を批判したが、結局その何千年に染められた国

家性を離脱できなかった。国家や家族の利益を強調している家・国家観と人倫思想の束縛から離れることができず、女性の個人としての成長が抑圧されてしまった。また、このような特徴は『中国新女界雑誌』に限ったことではなく、時代背景に基づいた普遍的な特徴である。温和派女権主義である『中国新女界雑誌』であれ、過激派女権主義である秋瑾が創刊した「中国女報」であれ、全般に言えることであると考えられる。

一方、「家」から見れば、「賢母」であれ、「良妻」であれ、女性の役割が付与されているのは、男女に性差が存在しており、それぞれ果せる役割が異なっているからである。『中国新女界雑誌』もこのような「明治良妻賢母」の影響を受け、男女における性差が存在していることを認める。それ故に、「家」という視座からすると、「明治良妻賢母」の二次受容には二つの特徴があるように思える。一つ目は、女性が男性化されたという清末における女性解放運動の潮流とは違い、「女性は男性に比べて特殊な生理的障害があり、またその体質は強くないので長時間で活動することができない」<sup>28</sup>というように、男女の性差を尊重したということである。二つ目は、男女の性差を尊重するがゆえに、女性の身近な権利に注目し、女性にとって受け入れられやすい形で、日常生活と密接に関連し、例えば日用化学、造花術、家政学などの知識を読者に紹介したことである。

上述の特徴は、『中国新女界雑誌』の温和女権主義の具体的な表れであり、また好評を博している原因であると考えられる。このような特徴は「国」という視座からまとめた当時においては普遍的なものではなく、『中国新女界雑誌』が持っている特殊な特徴であると考えられる。また、「明治良妻賢母」から影響を受けたが、その受容過程においては、そのまますべてを受け入れたわけではなかった。国家が危機に瀕している時に、国民一人一人がそれぞれの力を尽くして国家に貢献することが要請されたため、夫の内助の功にとどまるのではなく、自立心を持って夫とお互いに助け合うことが強調された。

---

<sup>28</sup> 「中国新女界雑誌」第五号、19頁。  
原文は「女子較男子有特殊生理之障礙、又其體質不強動靜云為難以持續」のである。

